日本 DDS 学会のあり様を考える

日本 DDS 学会理事長

松村保広*

国立がん研究センター
先端医療開発センター
新薬開発分野

早いもので、日本 DDS 学会の理事長に就任して1年半が経過いたしました。会員の皆様のご協力と事務局の助けもあり、何とか務めています。改革とまではいきませんが、公平性の確保および学会の質を守るという観点から、会費未払いが3年以上続いていた方々には退会していただきました。会員数が減ることになったとはいえ、昨今、学術学会に対する世間の目は厳しくなってきましたので、ご理解いただきたいと存じます。

私が理事長になって初めての学術集会は、埼玉医科大学消化器腫瘍科の濱口哲弥教授を会長に開催されました。準備万端と思っていたところ、直前になって、「赤字になる可能性があります」との連絡が入り、顧問や理事の先生方とも問題を共有し、対策を練りました。また、特別講演演者への謝金の減額など、あらゆる出費削減策を濱口会長に考えていただきました。結果的には予想を上回る参加者もあり、約170万円の黒字となりました。懇親会などにおける、催し物などなく、質素な会にはなりましたが、そもそも、学会の懇親会は、同じ研究を志す者たちが酒の力も借りて、ざっくばらんな議論をしたり、旧交を深めたりするところであると思います。学会のありかたについても、周りの厳しい目があります。そのような状況において、今回はたまたま質素になったとはいえ、肝心の学会そのものは大変盛り上がり、私は大いに満足いたしております。会員の皆様はいかがだったでしょうか。忌憚なきご意見をお寄せいただければ幸いです。

2020年の第36回学術集会は、神戸学院大学薬学部教授の武田真莉子先生を会長に、ご勤務先の大学で開催されます。そのために会期が6月27日～28日の土日となり、また、大学にはご迷惑をおかけしますが、ありがたいことであると思います。会員の皆様には、ぜひ参加し

ていただきますようお願いいたします。その際、学会をとりまく状況を鑑みて、発表時にCOIを開示すること、IRBの承認のない臨床試験の発表を認めないなどを提言したいと思います。

さて、この原稿は第15回日米DDSシンポジウムが行われているマウイのホテルで書いています。このシンポジウムは、副理事長の田畑泰彦京都大学教授と米国MITのLanger教授が中心となって、2年に1度開催されている会です。先ほど無事発表も終え、マウイのそよ風を感じながらパソコンに向かっています。きれいな海岸やプールサイドにはthong（複数形のthongsはサンダルのこと、単数形は女性の水着で、想像してください）をつけた若い女性とその恋人がじゃれあっており、目を覆いたくなるほどですが、浅いプールでは私と同じ年代のご夫婦とおそらくその孫たちが水遊びをしていました。そのとき思ったのですが、はたして、この夫婦は本当に健康なのだろうか、もしかすると、どちらかは、がんを患っているかもしれない、治療の合間に、人生の最後に、マウイにきて孫と過ごしているのかもしれない。研究者は得てして、自分の発明で病気を治すという気持ちが強いものです。その志は否定されるものではありませんが、我々DDSにかかわる人間は、病気の克服という目標と同時に、患者さんが一時の楽しい時間を過ごすことができる時間を提供するという使命があることも忘れてはならないと思います。若い研究者の方々へ、研究の合間に周りを見回してください。あなた方の優秀な能力と技術をもってすれば、そのような製品は無限大に創生できます。

本年も会員の皆様にとって、意義のある年になるよう祈念いたします。

**Yasuhiro Matsumura : Thinking about The Japan Society of DDS
President, The Japan Society of Drug Delivery System*

Division of Developmental Therapeutics, Exploratory Oncology Research & Clinical Trial Center, National Cancer Center